大谷學會春季公開講演要旨

日本文化の現實性

本學教授　藤島達朗氏

桂元離宮は見た所、清純素朴であり、貴族的な豪華絢爛の風はない。然もそれを注意深く眺める時に素朴さの下に高貴性をはらむ事に氣がつく。如何にも何氣なくうち出された素朴さ、素直さ、清純さは、然も最も、實際的でありつつ猶その下に豪華さをひめている。それは正しく、日本文化の本質をあます所なく表現している樣に思う。然らばかかる表現を可能ならしめた我國文化は、一體如何なる傳統を有し、如何なる經過を辿つて來たのであろうか。換言するならば、それは如何なる民族的態度に所以するものであるかを尋ねたい。

抑、人間生活の最高目標は、現世の莊嚴である。今私は、こうした事實に對する認識過程を考察する事に依つて如上の課題に答えたい。

古代人の神を中心とする生活を考える場合、「祝詞」がその史料としてとられるが、其處では最も多く社會的平和が願われて居り、次いで農事に關する願望、各個人の現實生活に對する願望等がみえている。此等に依つて、その現實觀は最も素朴であり、現世そのものに限られている事がわかる。かかる所に、因果觀を以て成立する佛教が渡來するのであるが、その渡來がもたらした思想的影響は、渡來時の受容形態を嚴密に吟味する事より行われて始めて歴史的たり得る。神を中心とする精神生活には、過去未來に對する感覺は稀薄である。死後の國なる事實をとらえても、それは決して現世と次元を異にする世界としては受け取られていない。

かかる思想を有する古代人に佛教が受容される場合、佛教の基調たる因果思想も、現實現世なる限界内に於て把握されたのは必然である。所謂「現報」と言われるものであり「靈異記」は卽ちこの立場に立つている。然しかかる考え方は、行詰る。生の依つて來る所、死の歸する所が反省される時に、過去未來觀は、因果思想の本質的理解と共に深化される。かくして佛教の提示した因果觀の體驗的理解の進展に依り、日本人のもつ世界觀は廣まつて行く。

かかる傾向の過程的なものとして私は、萬葉集をあげたい、其處には既に未來觀が表われてはいる、が然し、それは知識としての未來觀であり、未來に對する切實なる恐怖感の一片もみられぬ。卽ち如何にも、ほがらかであり、從つて未來に對する願望は、現世の完成を願望する事と、本質的な相異を有していない。未來は現實の同次元的延長として把握され、中心的現世への願望的餘波としてのみそれは成立する。佛像の銘文や寫經の奥書は、それを如實に物語つてくれる。かかる點に於て、我國に於ける淨土教の起源も、單なる無常觀に始源すると言うよりは、現實を肯定し、追究する所に、その始源的形態を認めねばならない。かくて現世と淨土の否定的媒介を有しない如上の段階に於ける宗教態度をみ、それのいちじるしく實體的であり、行的である事を知る。人間の力と存在を認め、未來を實體的なものとして確保せんとする思想、これこそ絢爛たる藤原文

化の表現的基底である。然し此處で反省さるべきは、日々の生活におびやかされ現世にあえぐ民衆の未來觀である。貴族の爲す實體的な行が不可能であり、不幸なる現實を有するが、せめて未來のみは幸福でありたいと願望する民衆の把握する未來觀の歴史性が注意されねばならない。生きんが爲になす所作、其處には自己の善人たるを許容する何ものもない。貴族の行的態度に依り、より强烈に拍車される民衆の現世への絶望と、未來への願望、この新しい文化的苦惱に答える所に、法然・親鸞は始めて歴史的たり得る。かくして現實肯定の世界觀より現實否定をその立場とする方向が完成する事に依り、日本人の持つ未來觀は展開し、世界觀は飛躍する。正しく鎌倉室町の文化は、かかる日本人の思想的展開を基調として、獨自なる性格を顯現して行つた。この樣な廻心の文化形成を、貴族武人は禪的な方向により、庶民は眞宗的に行なつたと考えたい。彌陀に救わるる事を教えられた田夫野人、それは總ての實體的なもの、現世的なものをすて、然もあくまで信仰を内にひそめ、何氣なき生活をなす。この樣な所謂妙好人の生活は、日本精神文化の實態を、あます所なく、生活化したものといえよう。

日本文化、それは狹い自然と、乏しい資源の中に置かれた人間の最高度の生活表現である。私は日本人が、かかる天地におかれ、然もその現實生活に精一杯の努力を盡す時に生ぜしめた文化なる點に於てその世界性を信ずるものである。

トインビーの史觀

本學講師　壽岳文章氏

トインビーが『歴史の研究』十三卷を書く樣になつたのはシュペングラーの『西洋の沒落』を見てそれが觀念的主觀的であるのにあきたらず、イギリス風の實證的科學的な精神から西洋文明のあり方を見てゆかうとしたからだつた。一九二七年に着手した最初の三卷は一九三六年に出版せられ、第四卷以後は一九三九年から後に書かれた。彼はこの書の中で諸多の文明の發生、生長、沒落とその公式、世界國家、世界宗教、空間と時間とに於ける文明、生命現象のリスム、現在の文明の將來への見通し等について綿密周到な研究調査の上の結論を與へてゐる。

彼によると、この地球上に發生した文明は廿四を數へるが今日尙活力を有するものは、西洋文明、ギリシャ正教を奉ずるロシヤ及東歐の文明、イスラム文明、インド文明、及び極東文明の五つにすぎぬ。西洋文明は現在は他の文明を制壓してゐるが、亡ぶべき運命の下にある。併しそれは絶對不可避的なものではない、回避し立直る餘地の殘されてゐるものだ。そしてそのことを可能にするものは精神的自覺である。

普通に文明は人種と環境との構成だと考へられてゐるが、この說は十分に妥當なものとはいはれない。風土氣候の等しい處にいつも同樣な文明が生れる譯でもないし、白色人種優越論の如きは爲にする處のある人爲的迷信だ。

トインビーは支那の易經の思想を借りて自己の歴史觀を形成